

ミオンボ林の中には、高級な家具になる有用樹が散在しており、また、チーク等の外来の高級材の育成の可能性もある。現に、これらの樹種の人工林は小面積みられるものの、地域の産業を支えるような大規模のものは見られない。雨の比較的多い地域では、木の成長も早いので、村落林業を振興する際も、育った木を、地域の産業に活用することを念頭に進めるべきである。

この中には、製材、家具、木工や煉瓦焼き、炭焼きのための造林等も含まれるが、あくまでも、地域の産業を起こし、かつ、その結果が、森林の破壊につながらないような配慮が必要である。また、今後、林業が盛んになった場合、木材の伐採技術にも目を向ける必要があろう。

⑧ 研究機関との連携。村落林業型のプロジェクトを進めるためには、現場における trial が不可欠であり、各プロジェクトでは、とくに最近では、アグロフォレストリーや、牧草の試験、在来樹種の試験などを積極的に実施している。これらの結果の情報交換を進めることが、大いに役立つ。また、プロジェクトによっては、ケニアの ICRAF 等との連携をとっている。今後、プロジェクトを進めるに当たっては、林業試験場や、ソコイネ農科大学等との協力、研究の委託等も行っていくべきであろう。

終わりに

以上、タンザニアで JICA 個別派遣専門家として村落林業普及のため各地をまわった経験に基づき私の考えを述べてみた。考えがよくまとまっていない点が多いので、御意見をいただければ幸いである。

新刊紹介

●森と人間の歴史 熊崎 実(訳) A5版 viii+276 pp. 築地書館 1990.12.20 刊 ¥2,900(原著 J. WESTOBY: Introduction to World Forestry・People and their Trees. Oxford, Basil Blackwell. 1989)

原著者 WESTOBY はもともと統計・経済の専門家であったが、1952年から'74年にわたって FAO において世界の林業問題にかかわった。その間に得た豊かな知識と、“all forestry should be social”といわしめた哲学によって、1988年末に世を去る直前に書きあげられたものである。その好著が、筑波大の熊崎教授によって翻訳、出版された。誌面が足りず内容を詳しく紹介できないのが残念であるが、Ⅰ：樹木について、Ⅱ：民衆と森林、Ⅲ：世界の森林、Ⅳ：主要な森林問題、Ⅴ：樹木を民衆のために、の5章から成る。適確な訳文が読み易く書かれているが、何よりも書題が原著の心を言い得ている。是非一読をおすすめしたい。(浅川)